

AO/TORI BUNKO

講談社 青い鳥文庫

すい せい
ムーミン谷の彗星

トーベ・ヤンソン／作・絵

下村隆一／訳





講談社 青い鳥文庫

21-2

ムーミン^{だに}谷の^{すいせい}彗星

トーベ=ヤンソン

^{しもむらういち}
下村隆一 訳

1981年2月10日 第1刷発行

2000年1月11日 第37刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-8001

電話 出版部 (03)5395-3536

販売部 (03)5395-3625

製作部 (03)5395-3615

N.D.C. 993 222p 18cm

装丁 久住和代

印刷 図書印刷株式会社

製本 図書印刷株式会社

© YASUE KUMAGAI 1981

Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-147045-0 (児二)

(落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえます。)

■この本についてのお問い合わせは講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

ムーミン谷の彗星

発行 講談社

KOMETEN KOMMER

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

Copyright ©1968 by Tove Jansson

Japanese language paperback rights arranged
with Holger Schildts Forlagsaktiebolag, Finland,
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

もくじ

第一章 7

第二章 32

第三章 40

第四章 75

第五章 92

第六章 118

第七章 142

第八章 162

第九章 181

第十章 216

解説 高橋静男 220

おもな登場人物

とうじょうじんぶつ

●ムーミントロール

勇気があり、心のやさしい少年。
遠いおさびし山の天文台に、
危険にみちた旅にでかける。



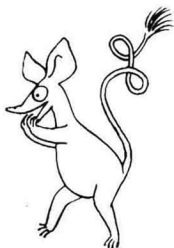
●スナフキン

ひとり旅がすき、音楽もすき——。
ムーミントロールと危険な旅にでる。



●スニフ

すばらしいどうくつを見つけ、
それにかわいい子ねこも見つける。





●子ねこ

黄色い目、
黒と白のまだらのからだ。
スニフにすぐわれ、
友だちになる。



●スノークのおじょうさん

前髪まかみがよくにあい、からだの色もかわる。
ムーミントロールのガールフレンドになる。

●じゃこうねずみ

哲学者。

地球ちきゅうがほろびてしまふ、と
ムーミン谷の人々を
おどかす。



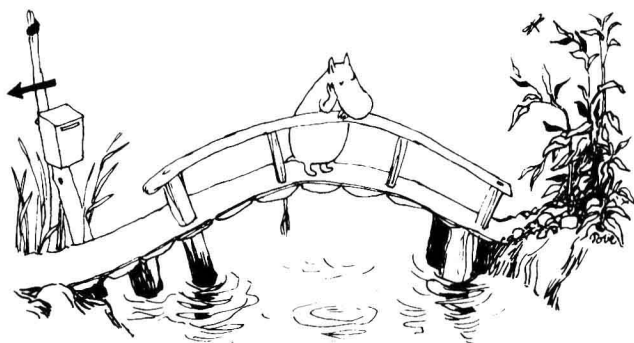
●ヘムル

彗星こみせいがこようが、
地球ちきゅうがほろびようが、
せつせと、
切手をあつめる。





第 1 章



ムーミンパパが、川へ橋をわたしおえたのとおなじ日の朝、小さな動物のスニフは、すばらしい発見をしました。いままで知らなかった、あたらしい道を見つけたのです。その道は、あるうすぐらい場所^{ばしょ}で、森の中へはいりこんでいました。スニフは、じっとたちどまって、のぞきこみました。

（これはムーミントロールに話して、ふたりでいっしょに探検^{たんけん}しなくちゃ。ばくひとりじゃこわいの。）

かれはそう考えて、あとで見つけやすいように、小えだを二本、×じるしにかさねておいてから、大きいそぎで走ってかえったのです。

ムーミンたちの住^すんでる谷間は、とてもきれいなところ^{ところ}です。そこには、小さいきものたちがたくさんしあわせにくらしていて、大きな木が青々としげっていました。野原のまん中を川^{なみ}が流れ、青い

ムーミンやしきのそばで、ぐるっとカーブしてから、ほかの小さいきものたちのいる土地へ、流れていくのでした。みんなは、この川がどこから流れてくるのだろうか、ふしぎに思っていました。

（道や川って、ふしぎなものだなあ。そばを流れていくのを見てみると、どこかへいきたくて、たまらなくなっちゃう。どこまでつづいているのか、つけていってみたい……。）

スニフは、そう考えました。

スニフが家へかえってみると、ムーミントロールはぶらんこを木につるしているところでした。

「おうい、ぼく、ひみつの道を見つけたよ。こわそうな道だぞ。」
と、スニフはいいました。

「どのぐらい、こわそうだい。」

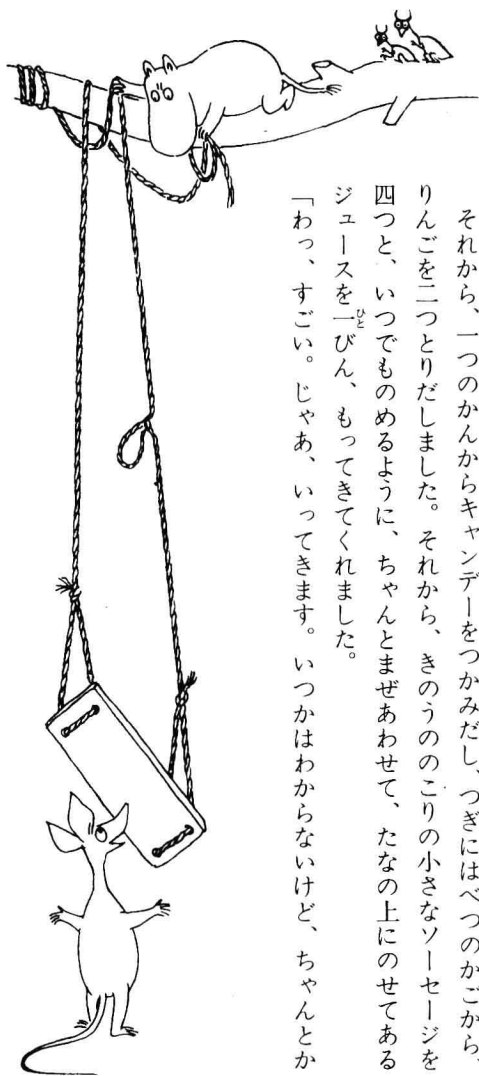
ムーミントロールがききました。

「ものすごくこわそうだ、といってもいい。」

小さなスニフは、まじめくさって、そんなへんじをしたのです。

「それじゃ、サンドイッチをもっていかなくちや。それから、ジュースもだ。」

ムーミントロールはそういって、台所のまどにむかって、どなりました。



「ママ！ ぼくたち、きょう、おべんとうをもってでかけるよ。」

「そうなの。そりゃいいわね。」

ムーミンママは、調理台^{ちようりだい}の上のついていたバスケットに、サンドイッチをつめこみました。

それから、一つのかんからキャンデーをつかみだし、つぎにはべつのかごから、りんごを二つとりだしました。それから、きのうののこりの小さなソーセイジを四つと、いつでもものめるように、ちゃんとまぜあわせて、たなの上にのせてあるジュースを^{ひと}びん、もってきてくれました。

「わっ、すごい。じゃあ、いってきます。いつかはわからないけど、ちゃんとか

えってくるからね。」

と、ムーミントロールがいました。

「気をつけてね。」

と、ムーミンママもいました。

ムーミントロールとスニフは、庭を横ぎり、野原をこえて、うすぐらい森のところまで、山のぼりました。その森の中へは、ふたりとも、まだはいったことがありません。

ふたりはバスケットを地面におろして、ムーミン谷を見おろしました。ムーミンやしきは、ごまつぶのように小さく見えるし、川はみどり色のほそいおびみたいに見えました。ぷらんこなどはまるで見えません。

「きみは、ママからはなれてこんな遠くまで、きたことはないだろ。ぼくはひとりだけで、ここまできたんだぞ。さあ、ぼくが見つけたあたらしい道を、見せてやるよ。」

小さいスニフが、えらそうにいました。

スニフは、あちこちさがしまわって、くんくんにおいをかいだり、太陽の位置を見さだめたりしていました。やっと大きな声をあげました。

「ここだ、見つけたぞ。うん、なんだって。この道が、こわそうじゃないって。そんなら、きみがさきに歩けよ。」

ムーミントロールは、びくびくしながら、みどり色のうすくらがりの中へ、はいつていきました。あたりは、まったくずまりかえていました。

「あやしいものがこないかどうか、四方八方に気をつけてくれよ。」

と、スニフがそつといいました。

「ぼくひとりで、そんなにぜんぶ見られるものか。うしろはだめだから、スニフ、きみがうしろを見はれよ。」

「いやだ、いやだ。うしろはいやだよ。なにかがおいかけてきたら、こわいもの。うしろは、じぶんで見てよ。」

スニフは、びくびくしていました。

「じゃ、きみが前を歩けよ。」

と、ムーミントロールがいいました。

「それも、いやだ。ぼくたち、ならんで歩くことにしない？」

そこでふたりは、ぴったりと横よこにならんで、どんどん森の中へはいつていきました。森は、ますますみどりがこくなり、



いっそうくらくなるばかりでした。しかも、はじめはのぼり道でしたが、やがてくだり道になって、だんだんほそくなり、しまいにはきえてしまつて、こけやしだけばかりになってしまいました。「道って、どこかへつづいてるものなのになあ。こんなの、いけないね。こんなふうになくなつちやうなんて。」

ムーミントロールはこういつて、こけの中へ、すこしはいりました。

「だけど、かえり道がわからなくなりやしないか。」
と、スニフが、小さな声でいいました。

「まてよ。なにか、きこえない?」

こういつて、ムーミントロールは耳をすましました。

木々のずつとおくから、かすかな音がきこえます。ムーミントロールは、またすこしすすんで、顔を上にむけ、くんくんとおいをかぎました。風はしめつぽくて、気持ちのいいにおいがしました。

「海だ。」

ムーミントロールはさけんで、かけだしました。かれは、およぐことが、なによりすきなので
す。

「まてよ、ぼくを、おいてきぼりにしないで。」

スニフはなき声をあげましたが、ムーミントロールは、海を目の前に見るまで、足をとめませんでした。それから、ゆつくり砂浜にこしをおろして、つぎつぎにおしよせる波を見つめました。どの波も、白いあわを頭にのせていました。しばらくすると、スニフも森からでてきましたが、ムーミントロールのそばにすわると、いいました。

「ぼくをほつといて、きみは走っていったね。ぼくを、危険なところへおきざりにしてさ。」

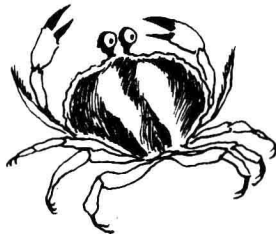
ムーミントロールは、いいわけをしました。

「ぼく、とつてもうれしくなっちゃったんだもの。谷も川も山も知ってるけど、海もこのちかくにあるとは、知らなかったんだ。」

まあ、あの波をくらんよ。」

「つめたい色をして、おこってるようだよ。あの中へはいったらずぶぬれになるし、あの上へのつかると、げろがでちゃうね。」
と、スニフはいいました。

「スニフは、水にもぐるのがきらいなの？」





と、ムーミントロールは、びっくりしていました。

「目をあけたままで、きみはもぐれる？」

「もぐれるけど、そんなことしたくないよ。」

と、スニフはいいました。

ムーミントロールはたちあがって、まっすぐ海へむかいました。

スニフがさけびました。

「どうなっても知らないよ。水の下になにがいるか、わからないんだぞ。」

けれどもムーミントロールは、日光がさしこんでいる大波おきなみ

の中へ、もぐっていききました。はじめは、みどり色のきらきらしたあわが見えるだけでしたが、やがて、海草が森のようにしげって、砂地すなじの上でゆれうごいているのが見えました。形のととのった海藻で、内うちがわがもも色で、外がわに白い貝がらが、きれいにくっついていました。もつとすすむと、くらい水の中に、黒いあながあいていて、底そこなしのふかさになっています。それで、ムーミントロールはむきをかえて、波なみの上へうかびあがり、その波なみにのって、浜はまべへもどりました。そしたら、スニフが、やかましくたすけをもとめているではありませんか。

「ぼく、きみがおぼれてしまったか、さめにたべられちまったんかと思ったよ。きみがいなくなったら、ぼく、どうなるんだい。」

スニフは、そうさけびました。

「ばかなこというなよ。ぼくは、水になれてるさ。それに、ぼく、もぐつてるとちゅうで、いいことを思いついたんだ。すごくいい、ひみつの思いつきだぞ。」

「どのぐらい、大きいひみつ？『谷底たそきへおとされてもいい』ぐらいの？」

ムーミントロールは、こっくりうなずきました。

スニフは、早口でまくしたてました。

「もしか、このひみつのひみつをまもらなかったら、ぼくは、谷底たそきへおとされてもいいし、はげたかに、この足をくわれてもいい。一生、アイスクリームをたべられなくなってもいい。それ